

著名な古典『平家物語』や『奥の細道』等の冒頭は、古来名文として名高く、多くの人に親しまれてきた。こうした名文・美文等

は、その後もさまざまな場や形で受け継がれてきたが、時代や社会の変化により、今日では全く影を潜めてしまった。

そこで、そんな系譜を探る意味から、明治・大正期に郷土の人がのこした文学の一端を次に紹介する。

春風春雨能く花を開き、春雨春風復た花を散ず也。此間の消息深く透徹するに非ずん

ば、人生変遷の真義また遂に悟了し得可らず。言う莫れ、昨日の知恩、今日の仇と。宇宙の妙、却つて此間に

あらずとせんや。一栄一落是れ春秋。何ぞまた驚くに足らずとせん

### 声に出して読みたい郷土の近代文学（一） 鎌倉貞男

も、然かも亦時に感じては花にも涙を濺ぐ所、寧ろ英雄の真面目としも謂つ可し。唯夫れ柳は緑、花は紅と観一観、了了するに至りて、乃ち能く真如実相の月を認め得可けん而已。虚榮頼むに足らず、偽善真に憎む可し。

に、文章は極めて格調の高い文語文である。それも和文ではなく、漢語の多い漢文訓読調で、今日我々が読んだり書いたりする文章とは大きく異なっている。子細に見ると、対句や四字熟語が随所に

風吹かば吹け、雨降らば降れ、四時行れ百物成る。非常か尋常か、尋常か非常か、甚麼作

か是れ天地の妙諦！  
（句読点等筆者）

一 羽生永明の稿本  
『南信』より一

一 読して気づくよう

体である。

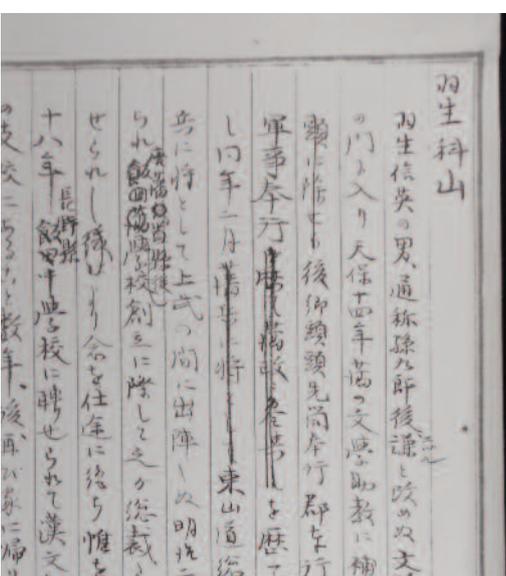
こうした簡潔で緊張した表現は、漢籍を学ぶ、漢学に通じた昔の人でないとなかなか書けない文章だと言えよう。それだけに音読して、現代人が失った語調を楽しみ、文章の深い意味もくみ取りたい気がする。

この文章の作者は、羽生科山（超然）こと譲（一八一二～一八九五）である。科山は、飯田藩家老に累進した羽生信秀の子である。藩儒渡辺八郎の門に学んだ後、郷頭頭・先筒奉行・郡奉行・寺社奉行・町奉行・用人・軍奉行等を歴任し、深く藩政に関わった。折から、江戸から明治への激動期、戊辰戦争が起

こると、科山は、東山道総督の命により藩兵の将となつて上総・武蔵方面に出陣した。翌年、藩の権大参事に任ぜられ、廃藩置県後は学校創立の総裁として活躍した。

しかし、明治四年に飯田県が廃止されると、自ら官途を離れ、子弟の教育に当った。同十八年、県の旧制中学校に招聘されて、飯田支校（現飯田高校）

や上田支校（現上田高校）で教鞭を執ったが、数年後には帰郷し、再び郷土の子弟を教え、悠々として余生を送った。明治二十八年没、享年七十四歳。



羽生永明の自筆原稿